Wizardry®

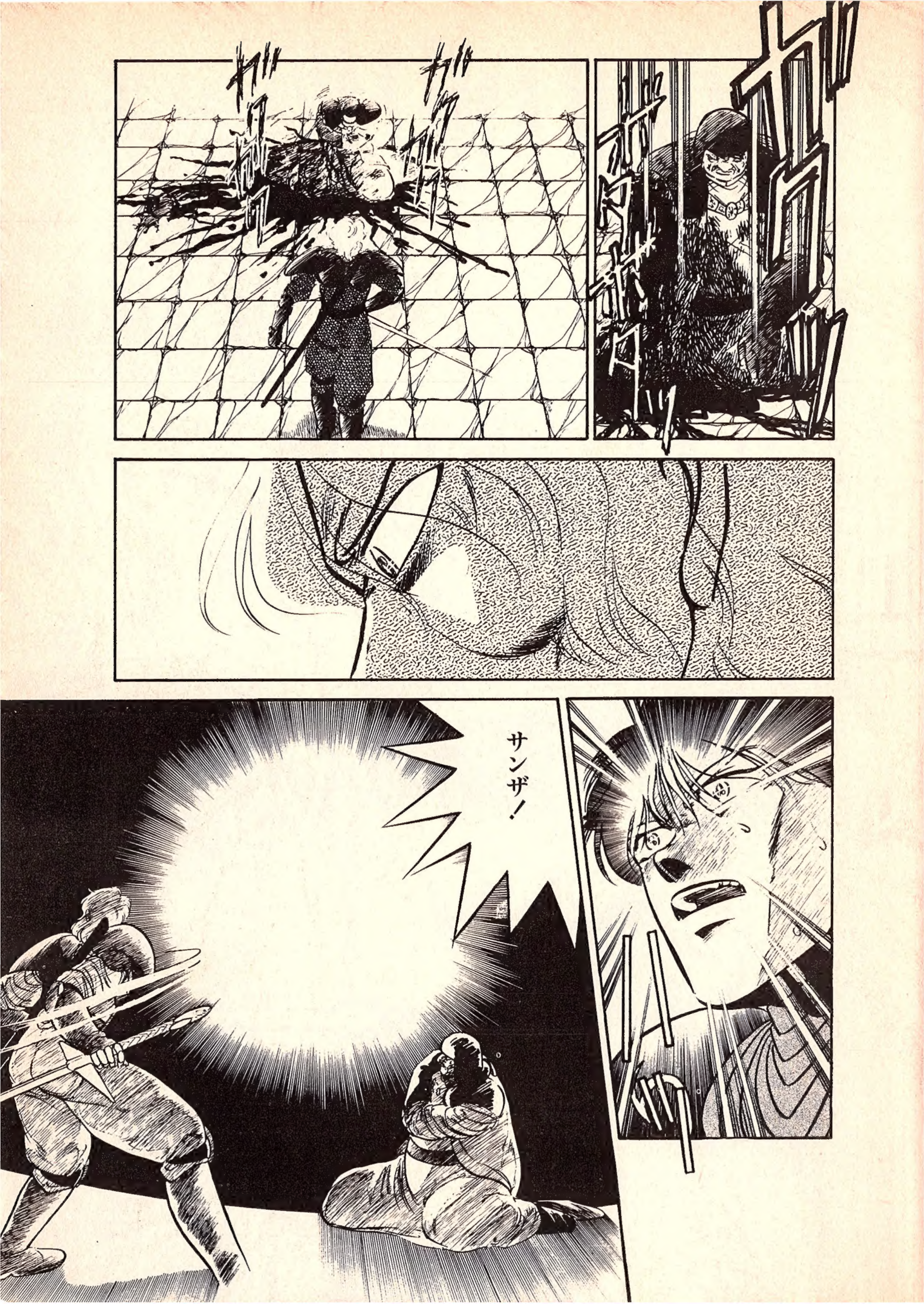
第6話「天使」

ウィザードリィ外伝

ギルの迷宮

魔導士ギルを斃すため迷宮へと召換されたショウとルーシィティティ。そこには忍者のサンザとビショップのシェーラが2人を待っていた。4人は襲いかかる怪物の群れとの死闘を続けながら、邪教徒の待ちかまえる2階へと突入する。そしてシェーラはかつて自分がギルの高弟の一人であったことを告白したとき呪殺の呪文が……。

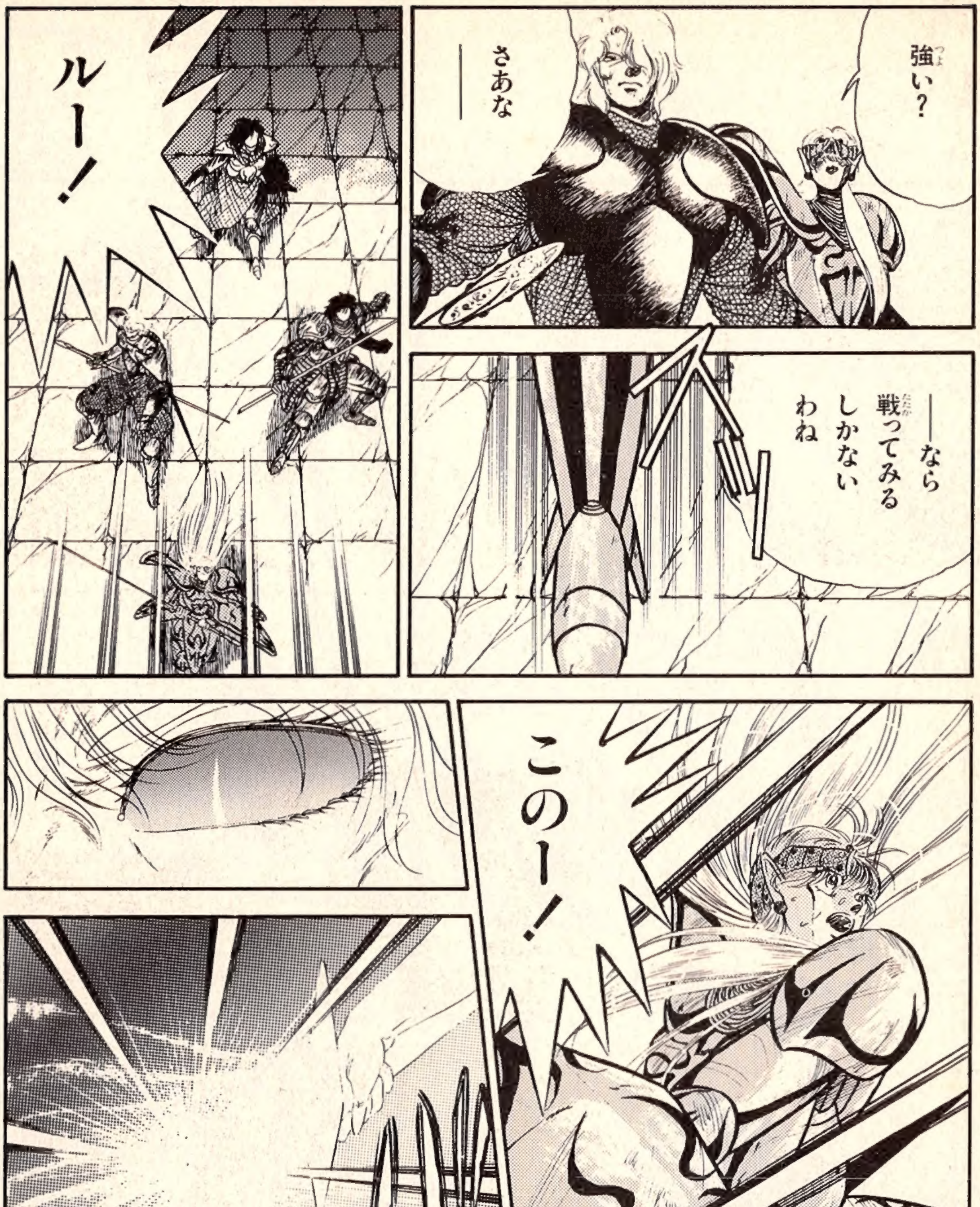
ダッ


サンザ！

バババババババ
ザッ
ギエッ!
チッ
ゴ
な……
ダッ
うっ……

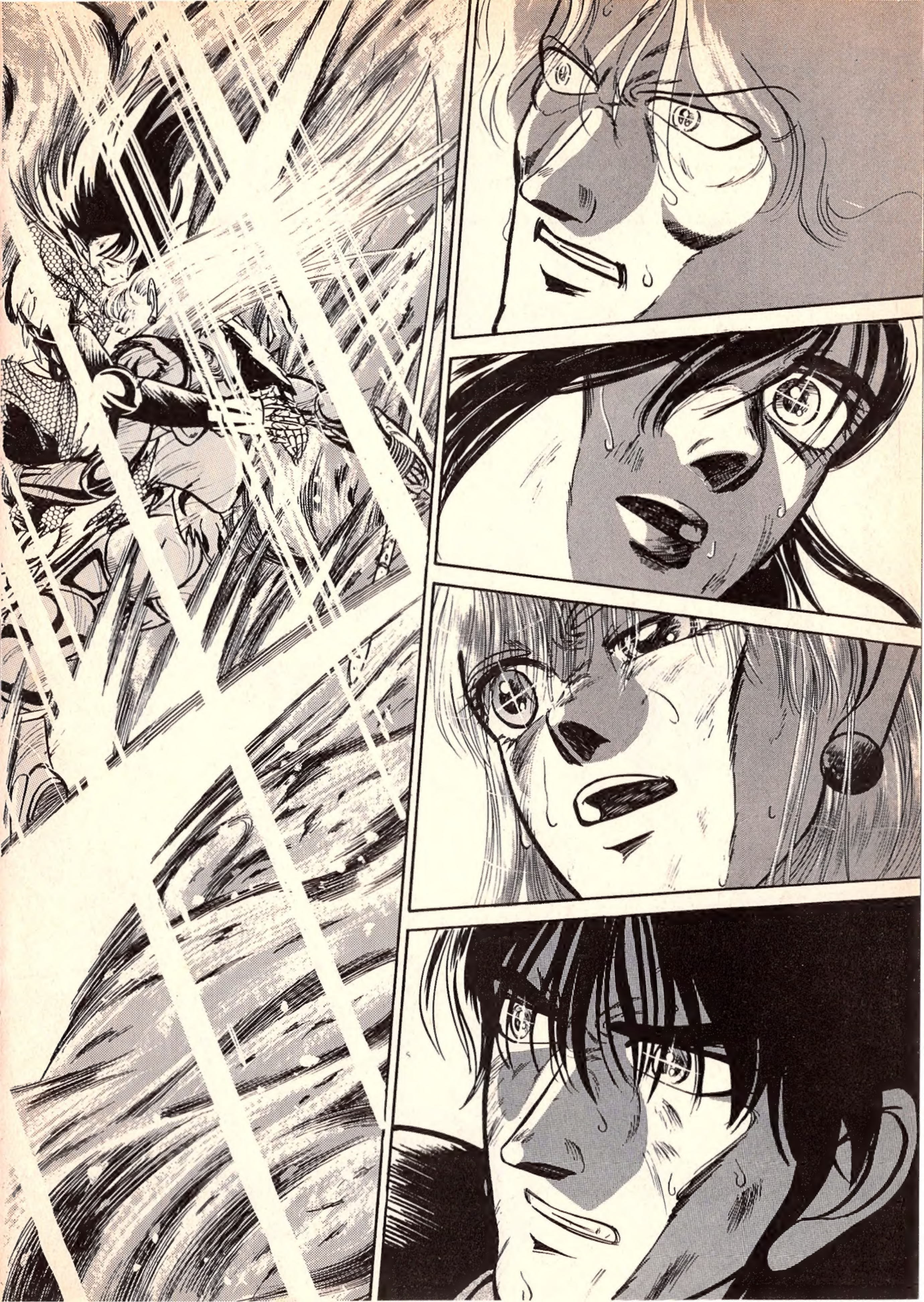
鋭い勘
素早い
動作――
人の身で
ありながら
なかなかの
ものよ――
シェーラさん
――
気を失って
いたようね
……

な……
何なの？
受け売りですまんが
おそらく——
旧世界の神の眷属
な何！
こいつら!!
下で戦った悪魔とは対極に存在する種族——
天使族だ

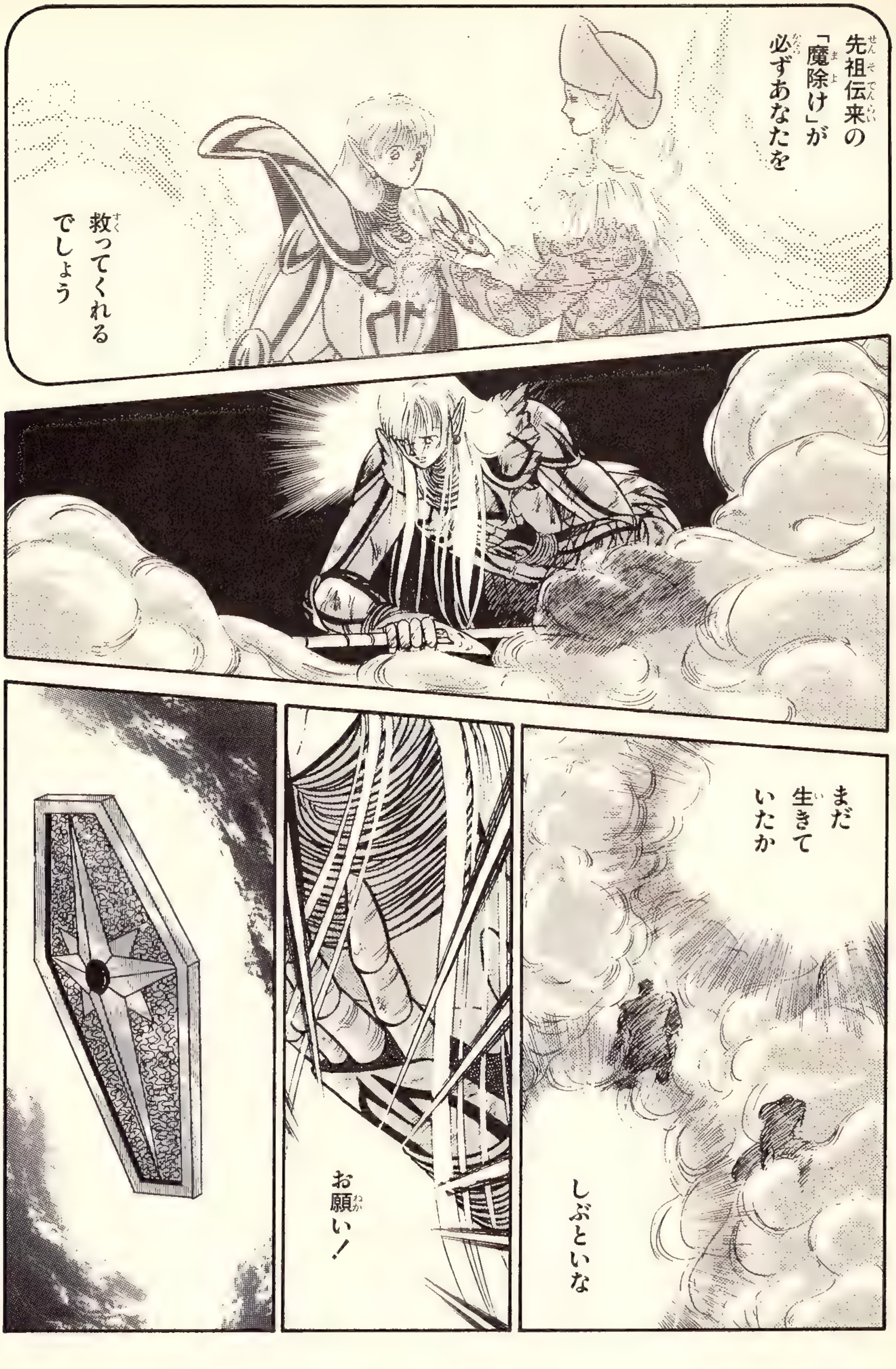

強い?
さあな——
——なら戦ってみるしかないわね
ルー！
このー！

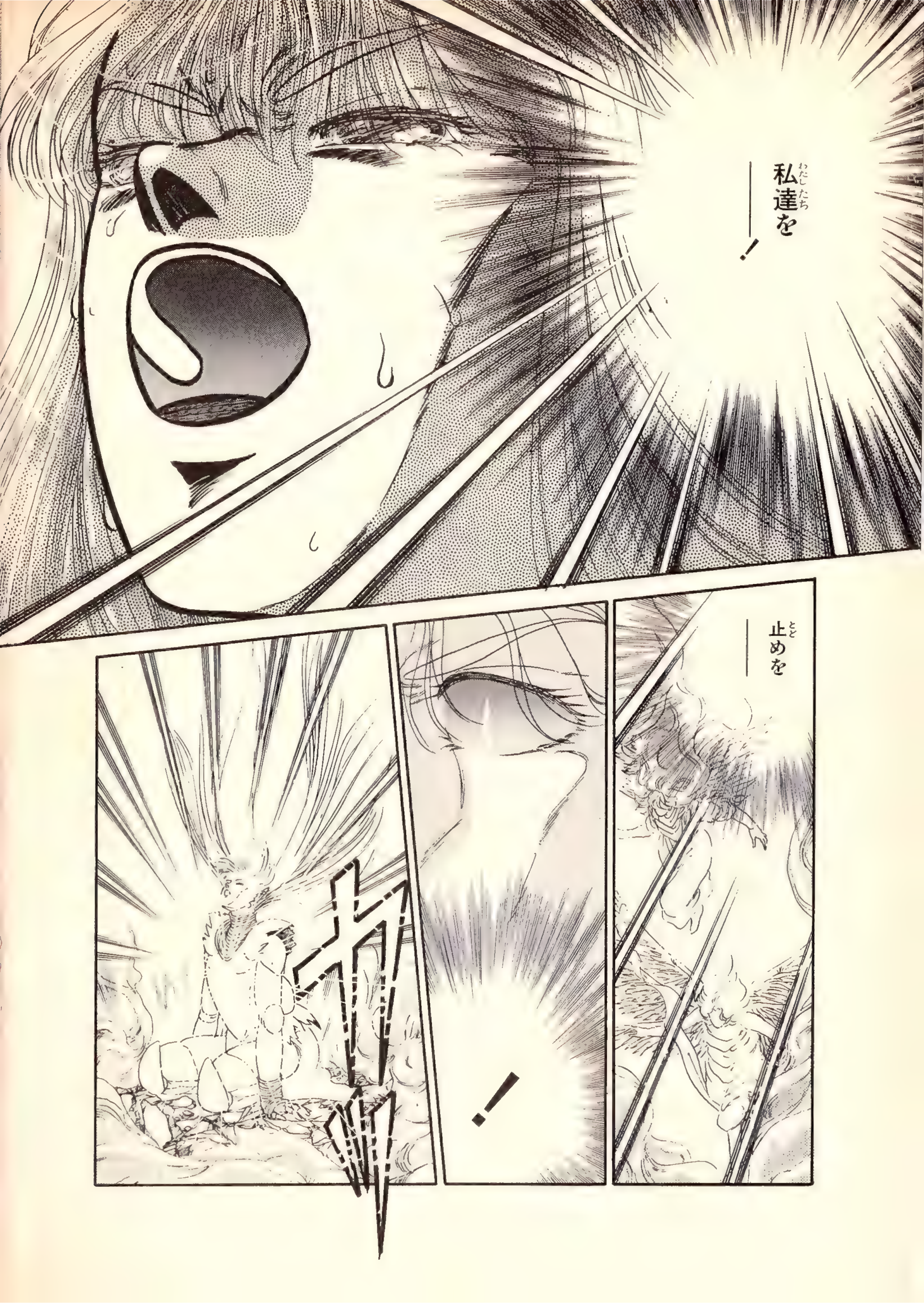
!
ルー！
くっ……

シェーラ
治療呪文は
気休め程度にしかならないと思うけど……
愚かしいことを
封印され衰えたりと云えども
絶対の父なる主の眷属に敵対するとは
天罰を受けるがいい――
大炎！



——
くっ……——
身体が——
ルー
母さま
窮地に陥った時は——
祈りなさい


先祖伝来の「魔除け」が必ずあなたを
救ってくれるでしょう
まだ生きていたか
しぶといな
お願い！

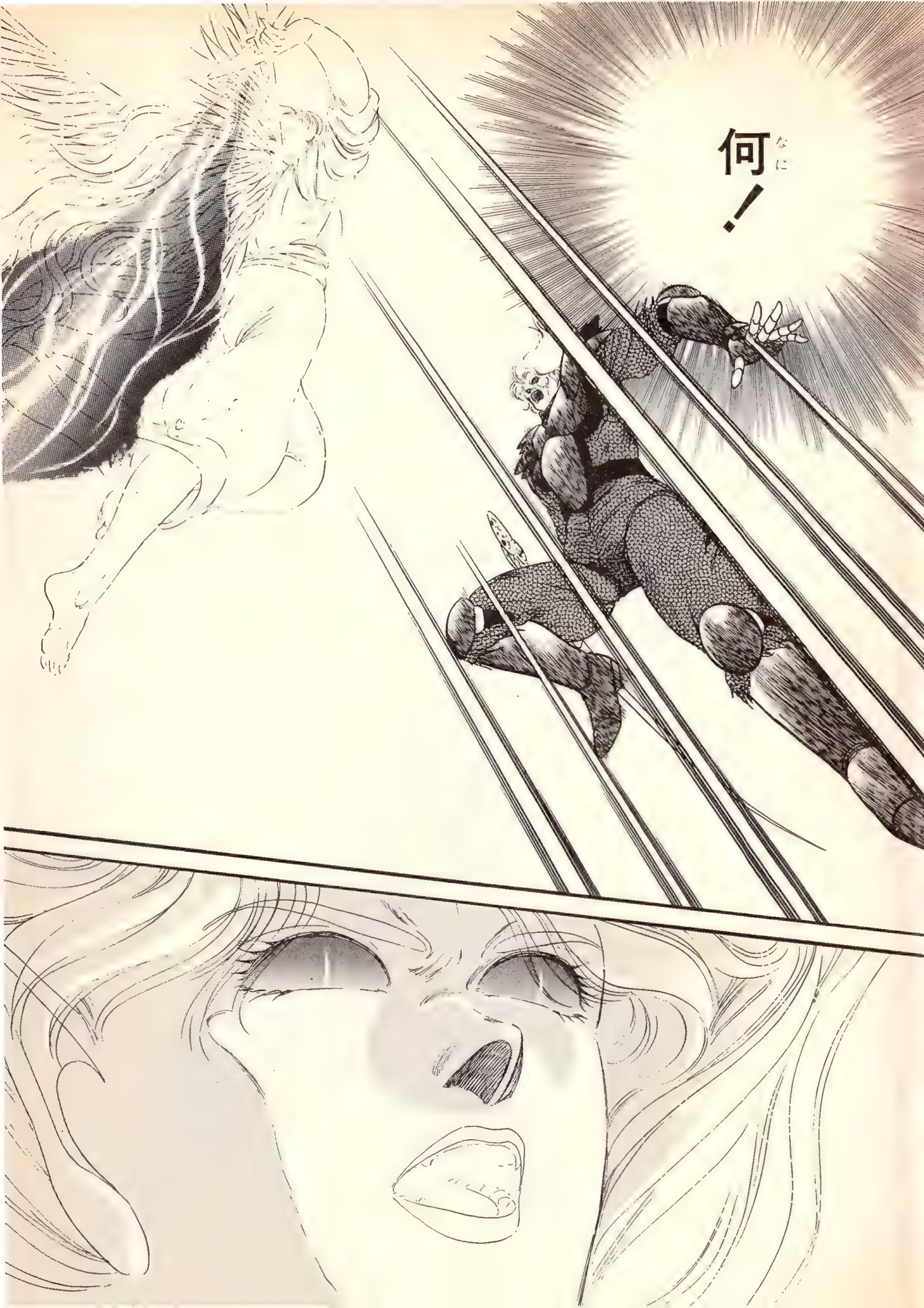

私達を——!
止めを——
!

くっ…
こ、これは――
体力が――

スッ
ザッ

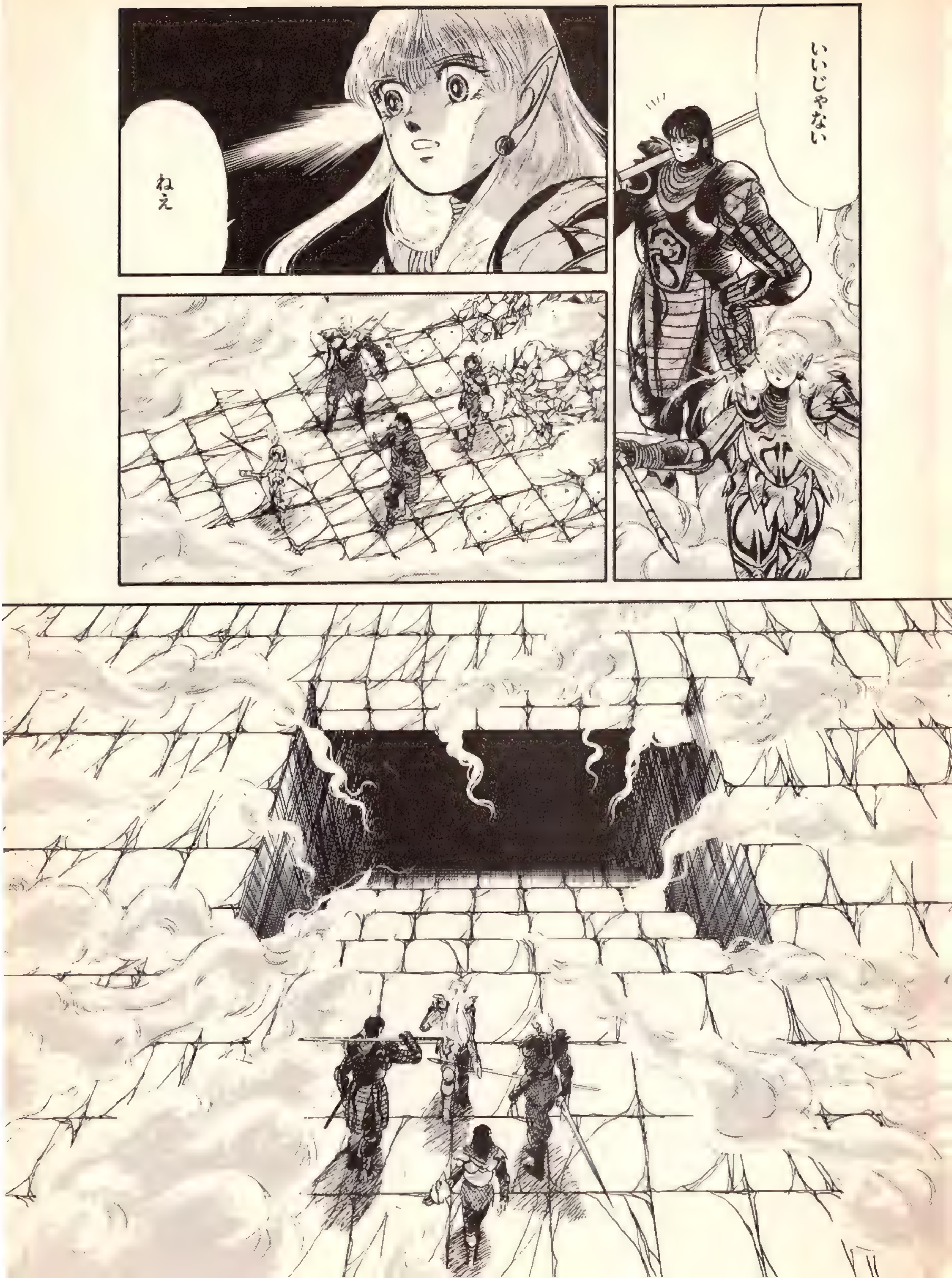
なめるな――
体力さえ充分ならばこの程度の攻撃で――
殺られはしない!
たいしたものよ――
しかし今ギルの所業を
妨害されては困るのだ――

我らが
眷属が
再臨する
ためにも
「召喚の書」に
ギルを操って
もらわねば
ならぬのだ!


何！

バ…カ…な人……
ご…と…き…に

タッ
ふう——
助かった
——な
——けど
どうして
いきなり
元気に
なったんだ?
??
母さま
——


いいじゃない
ねえ

次号(Vol.2 1月5日発売)につづく//　　**TO BE CONTINUED**

WIZARDRY II

小説ウィザードリィII

風よ。龍に届いているか

第6回

迷宮に消えし百戦錬磨の冒険者たち。
巨漢の超戦士ガッシュ。ドワーフの重戦士ボルフォフ。
美丈夫の剣士マイノス。格闘技術を磨く盗賊フレイ。
そして呪文の使い手エレインとアルタリウス。
彼らを待つのは宝珠か、それとも破滅の罠なのか——。

作／ベニー松山
イラスト／高橋政輝

〔第六章〕 夢魔

俺の目の前に、女が立っていた。

見覚えのない女だ。

いつから、そこにいたのか。

そんなことを心の片隅で考えながら、俺は何やら柔らかい椅子に座って女を見上げている。

女も、俺を見つめていた。

美しい貌立ちだった。

紅い唇に薄く笑みを浮かべ、形良く尖った顎を軽く持ち上げて、半ば閉じかけた眼で見おろしている。

蠱惑的な表情だ。

美しいが、尋常ではない。精神の奥底に澱んだ暗い部分をくすぐるような、妖しく淫靡な魔力を秘めた美だ。

見つめられていると、どす黒く暴力的な欲望がゆっくりと首をもたげてくる。

だが、俺は目をそらすことができない。虜になったように、その切れ長の瞳を見つめ返している。

やがて女が瞼を閉じ、呪縛が弱まった。おかげで、視界が少し自由になる。

その時初めて、俺は女の全身を見た。

一糸も纏わぬ裸体が、そこにあった。

異様なまでに白い肌が、俺の前に晒されている。一度として陽光を浴びたことのない、闇の中に蠢く魔の白さだ。

恐ろしく官能的な、成熟した女の肉体だった。

男には抗うことのできぬ強烈な吸引力を持ったその肢体が、惜しげもなく露になっているのだ。

心の何処かで警報が鳴っていた。

しかし俺は惚けたように、この妖女に魅入られている。

頭の中に霞がかかっているようだ。一部の都市エルフが好んで使う強力な阿片を吸ったような気分だった。

気がつくと、女はその場に跪いていた。

女の顔と俺の顔が、同じ高さになっている。

前号までのあらすじ

精霊神グニルダの恩寵により、あらゆる外敵から守られ続けてきたリルガミン市。しかしその聖都も原因不明の天変地異に見舞われ、滅亡の一途を辿っていた。異変の原因究明のため王国は多数の冒険者を募り、街の北に聳える禁断の山に隠された神秘の宝珠の探索を命じた。探索を続けて約一年。冒険者たちは自らの能力を磨き、山中の迷宮は宝珠の守護龍'ル ケブレスの護る最上層を残してすべて踏破された。使命の達成は目前であった。

主人公ジヴラシアは独り迷宮の怪物相手に実戦経験を積み、満たされぬ思いを抱きながらリルガミンの街へ帰還しようとしていた。その帰途、マイノスたち善のメンバーを連れたガッシュ、ボルフォフらがいよいよ最上層に向かう場面に出くわす。別れを告げ、意気揚々と迷宮に入っていくパーティ。しかしその直後に死を告げる精霊バンシーが現れ、彼らの行く手に不吉な翳を投げかけたのだった——。

主な登場人物

・ジヴラシア……主人公。レベル13の忍者。悪・人間族。この物語の〝俺〟。
・ガッシュ……レベル15の戦士。中立・人間族。
・ザザ……レベル13の僧侶。悪・人間族。
・マイノス……レベル12のロード。善・人間族。
・フレイ……レベル13の盗賊。中立・ホビット。
・ボルフォフ……レベル13の戦士。中立・ドワーフ。
・アルタリウス……レベル13の僧侶。善・ノーム。
・エレイン……レベル13の魔術師。善・エルフ。
・'ル ケブレス……迷宮を支配する龍。〝平衡の守護者〟。

あの眼が、また俺を見ていた。

軟体動物のしなやかさで、豊満な肉体を煽情的にくねらせながら、這うように女は近づいてきた。

互いの顔が、もはや30センチと離れてはいない。その端からわずかに覗いた血の色をした唇が満足気に吊り上がった。

濡れた舌が、ちろりと上唇を舐める。

その唇が開き、蠢き始めた。

俺の耳に、微かな囁きが聴こえてきた。

〝貴方の望みは何？ どんな欲望も、ここでは思いのまま〟

長い睫毛の奥で、瞳が妖しく光った。

〝わたしが叶えてあげる〟

女の顔がさらに近づき、俺の視界はなまめかしく伸縮する真っ赤な唇で一杯になった。

〝何でも――〟

甘美で淫らな囁きが、耳を聾せんばかりに響いている。

〝貴方はただ一言、口に出せばいい。そうすれば、すべての思いは貴方のものよ。欲望のままに、さあ――〟

警報が高まった。痺れたような頭の中で、言いなりになってはならないと俺の理性が叫んでいる。

だが、女の言葉には強制力があった。操られるように、それを口にしたい欲求が込み上げてくる。

持ちこたえ、俺は喘いだ。

身を引いた女が、眉を吊り上げた。そして、気をとり直したように妖艶な流し目を送る。

〝何を耐えているの。欲望を隠す必要などないのよ。それに――〟

目の前から女の姿が消えた。

〝貴方の望みは、わかっているわ〟

姿がないにもかかわらず、声は一層近くから響いてくる。女の息遣いまで、聴こえてくるようだ。

細く白い十本の指が、俺の後ろから視界に入ってきた。紅く煌めく長い爪で頬をからかうように掻いた後、柔らかい指先が両側から俺の顔を包み込む。

その指にしたがって、俺は首を横に巡らせた。

女の顔が、そこにあった。

ようやく、俺は気づいた。

俺が先刻から座っていたものは、この女の躰だったのだ。

女が背後から、締めつけるように四肢を絡ませてきた。女の肉体のこの世のものならぬ感触が、急速に現実味を帯びてくる。

くく、と喉を鳴らして嗤い、女は俺の耳元に唇を寄せた。

〝さあ、言っておしまい。心の奥に秘めた、不道徳な望みを！〟

「やめろ！」

絶叫とともに、俺は呪縛から解き放たれた。

堅いベッドの上で、俺は肩を弾ませて喘いでいた。

光量を落としたランプの光にぼんやりと浮かび上がった、見慣れた部屋の風景があった。

冒険者の宿と呼ばれる、迷宮探索の冒険者のために造られた宿泊施設の中の一室だ。さして広くもない個室で、かなり前から俺が継続して使っている。

少し落ち着きを取り戻し、俺は乱暴に毛布をはねのけた。

べっとりと寝汗をかいていた。空気に晒された汗のせいで、裸の上半身の熱が不快なほど急激に奪われていく。

激しい喉の渇きに気づき、ベッドの傍らの卓上に置かれた水差しから直接水を飲む。しかしそれでもおさまらず、俺はベッドの下から酒瓶を一本引きずり出した。

封を切るのももどかしく、らっぱにあおる。琥珀色の液体を臓腑に流し込み、俺は一息ついた。

本来なら強いだけが取り柄の安酒だが、異変に伴う食量難で酒の類も徹底して配給制が敷かれており、闇ルートではこれがお話にならないほどの高値で売られている。三百ゴールドといえば、魔法の封じ込められた解毒薬一瓶と同じ値段だ。

今呑んだ分だけでも五十ゴールドは下らないだろう。だが、それだけの効果はあった。
腹の底から這い上ってくる灼けるような熱さが、逆に精神を冷静にした。
やけに生々しい夢だった。
あの女の顔が、目覚めた今も目に焼きついている。そればかりか、押しつけられた肉の触触までもが、まだ背中に残っているようだ。
それに、あの囁き。
俺は一体、何に怯えていたのか。何を言おうとし、耐えていたのだろうか。
いや、夢に意味などない。ただの悪夢だ。そう思いたかった。
夢の女の記憶を振り払おうと、俺は別のことを思い浮かべようとした。
また、女の顔が脳裏を過ぎった。が、あの女ではなかった。
同様に美しいが、より不吉な運命を予感させる顔。振り乱した長い黒髪の間から、紅い瞳がじっと俺を見つめている。
それは、ガッシュたちを見送った直後に現れた、あの嘆きの精の顔だった。
ここに至り、俺はようやく現状を理解した。
昨日の記憶が、鮮明に蘇ってくる。
嘆きの精を見た後、俺は急ぎ迷宮へと走った。だが、入口からエレインの転移の呪文で一気に上層へテレポートしたのか、パーティの姿はすでになかった。
追ったところで凶兆あり、と伝える以上のことはできないが、それ以前に呪文を持たない俺が後を追える訳もない。仕方なく馬車に戻り、怯えきった衛士をなだめながら街に帰ってきたのだった。
俺もあの時こそ驚いてはいたものの、車上の帰路の間に次第と冷静さを取り戻した。嘆きの精も今では不浄な不死怪物に成り下がっているものがほとんどで、かつての死を告げる力が残っているかどうかは疑わしい。異変で狂ったモンスターが、荒野に彷徨い出ただけかも知れないのだ。
それでもこの件に関しては、衛士にきつく口止めをしておいた。宝珠を探索中のパーティに死を示す予兆があったなどと噂が流れては、リルガミン市内にちょっとしたパニックが起こるだろう。何といっても、宝珠は異変にさいなまれるこの世界の、最後の望みの綱なのだ。
不安は残っていたが、俺にできることはそのぐらいだった。第一あのガッシュやボルフォフが、そうそうどじを踏むとは思えない。
街に戻り、宿の部屋に入るや否や、強烈な睡魔に襲われたのが昨日の最後の記憶だった。
どうやら食事もせずに、宵の口から眠り込んでいたらしい。
そう思った途端、猛烈な空腹感が襲ってきた。昨日の朝以来、食べ物は何も口にしていない。空きっ腹に流し込んだ酒の刺激が引き金になったようだ。
俺はベッドから下り、服を着込んだ。そして東向きの窓にかかっている厚いカーテンをめくる。
外はまだ暗闇に包まれていた。払暁と呼ぶにもまだ早い時刻だ。
配給の朝食まではあと何時間もあるだろう。忍者の肉体は絶食にも耐えられるように鍛えられているが、それは非常時の話だ。意味なく耐えてみてもしょうがない。
宿の者に話をつけ、昨夜の分の食事を出させるつもりで、俺は部屋を出た。誰かが喰っちまったというなら、そいつの朝食を回させる手もある。
両側に扉の並ぶ薄暗い廊下を抜け、階下へと下りる。一時期に二百名を数えた冒険者を収容するべく、もとは大貴族の館だったという建物を増築して完成したこの宿は、市壁に囲まれた限られた土地しかない城塞都市の中にしてはむやみに大きい。特に冒険者の数が十分の一になった今は、その広さを少々持てあまし気味だ。
一般の宿に比べて、この施設の料金は極めて安い。というのも、宝珠の探索者として登録した者しか利用できない市直営の宿だからだ。
それでも 王国の協力者である俺たち冒険者の宿が有料というのはおかしな話だ。これは当初冷やかし半分のごろつきどもが寝床を得るため

だけに冒険者登録をしたためで、戒めにそこそこの料金が定められたということらしい。
実際に迷宮を探索すれば、古代の貴重な魔法の品やフレイの金貨のような金目のものがかなり手に入り、ある程度の料金は苦にならない。困るのはやる気のないえせ冒険者だけということになる。
現にそういった連中が淘汰され、新たな冒険者も訪れなくなった今では、宿代はあってなきが如しとなっている。俺の部屋も本当なら週に五十ゴールドを払うべきなのだが、一日わずか一ゴールドでいいことになっていた。
亡き館主の寝室だったという広いスイートルームもあり、この部屋などは週に五百ゴールドの値がついていた。洗練された調度品に囲まれた恐ろしく豪華なこの部屋での一週間は、食事以外はそれこそ王候貴族の気分が味わえる。いつ命を落とすとも限らない危険な任務に就いている冒険者にとっては、このくらいの贅沢は惜しくないようだ。
それも今では日に十ゴールドになり、それをいいことにここを独占している冒険者もいる。馬車の上でならともかく、柔らか過ぎる羽毛のベッドは躰に毒だと俺は思っているのだが。
一階のロビーにさしかかった時だった。奇妙な感覚に襲われて、俺は足を止めた。
立ち止まったことで、それがはっきりとわかった。
大気が震えている。
ちりちりと、空気が張りつめた気配を放っていた。
何かが起こる。そう思った瞬間、屋敷全体がぎしりと重く軋んだ。
足下から、低い振動が伝わってくる。
突然、突き上げるように大地が大きく揺れた。ガラスの割れる音があちこちから鳴り響く。壁に稲妻のような罅が走り、天井から細かな建材の破片が降り始めた。
例の群発地震だ。それもこれまでで一番でかい。
俺が迷宮を出てからは鳴りを潜めていたが、それはこの時のための力を蓄えていたかのようだった。

揺れていたのは十秒にも満たなかっただろう。だが、それはやけに長く感じられた。
振動が鎮まると、ロビーに通じる両翼の通路から、叩き起こされたらしい何人かの声が聴こえてきた。
俺は不吉な思いに駆られ、小走りにロビーの先の玄関から外に出た。
この出入口は北に面しており、そこには門に通じる中庭がある。
庭に出ると同時に冷えきった夜気が肌を刺したが、ほとんど気にはならなかった。門に向かおうとし、俺は動きを止めた。
中庭も、向かって左手にある厩舎から聴こえる、地震で驚いたらしい馬のいななきで騒がしくなっていた。
その闇の中に、誰かの気配があった。
ロビーにいた俺より早く外に出られた者はいない筈だった。外から入ってきた者——となると夜盗の類か。猛者揃いの冒険者の宿に盗みに入るまぬけがいるとも思えないが、油断はできない。
人影は、厩舎の前に立っていた。
そいつが何やら身動きした。ややあって小さな携帯ランプの光が灯る。
薄い布に身を包んだ精悍な男の姿が、暗闇に浮かび上がった。
戦士のような体つきではないものの、布の上からも充分に鍛えられて引き締まった男の肉体を見てとることができる。
後ろに流した癖のない金髪が、ランプの光を反射して淡く光っている。
その下に、笑みをたたえているように見える整った顔があった。
俺はすでに緊張を解いていた。
男の名はザザ。マスターレベルの僧侶で、悪の戒律の人間族。俺の仲間の一人だ。
「ザザ」
俺の呼びかけで、ザザがこちらに気づいた。目が細まり、無邪気にすら見える笑顔になる。
「さすが。最初に飛び出してくるとは驚きです」
「それよりお前、また馬小屋か」
地震の前にロビーにいたなどと説明するのが面倒で、近づきながら俺

は自分の質問をした。

「はい」

ザザは厩舎に目をやった。「ここは落ち着きますから。馬と寝起きを共にするのは良いものですよ」

宿の料金が厳然としてあった頃、金のない者はよくこの厩舎に潜り込んで泊まっていたものだった。雨露がしのげるのはいいが、匂いがきつく、蚤がうるさいために、快適な寝床とはお世辞にもいえない場所だ。

宿がただ同然になった今ではこんなところで寝る必要もないのだが、この物好きな男は好んで厩舎に寝泊まりしている。

しかしながら、ザザに不潔な印象は皆無だった。厩舎独特の臭気も、どういう訳かこの男にはまったく移らないようだ。

不思議な男だった。

「それにしても随分揺れましたね。このところの地震は小さなものばかりだったのに」

「全くだ。だが、見たところ被害は思ったほどじゃあないな」

中庭を通して見える周囲の建物で、地震の影響を酷く被っているものはないようだ。あの揺れでは塀のひとつやふたつ倒壊していてもおかしくはないと思われたのだが。

「グニルダの杖の力が、まだ少しはこの都市を保護しているのでしょう。もっともそれが当てにできるほどなら、我々が迷宮に入る必要もないのですが」

「この宿が崩れなかっただけでも、充分有り難いね」

俺は老朽化しかけた館を見上げた。「こいつが真っ先に潰れても俺は不思議じゃないぜ」

「馬小屋で寝れば安心です」

ザザはにっこりと笑って言った。この屈託のない笑顔を見ていると、この男が俺よりふたつ年上だとはとても思えない。まだ十代といっても通用するほどだ。

まして、ザザが戦いにあっても魔術師顔負けの強力な攻撃呪文を自在に操る冷酷な殺戮者であるなどと、誰が信じられるだろう。

他の冒険者も幾人か中庭に出てきた。やはり周りの様子が気になっているらしい。

その時だった。

誰かが短い叫びを上げた。

俺とザザはそちらを見、そしてそいつが見ている北の方角を見た。

荒野の向こうの岩山のシルエットが、この距離からでも威圧するかのように天に伸びている。

その山頂が、不気味に赤く光っていた。

光は数度ゆっくりと明滅を繰り返すと、やがて闇に溶けるように消えていった。

冒険者たちは騒然となった。岩山に何らかの異変が起こっている。

俺はザザと顔を見合わせていた。

「ガッシュたちがスケイルに入ってる。先刻の地震で――」

「リルガミンの外はもっと深刻でしょう。楽観できません」

ザザは眉を寄せた。「それに、今の光も」

背中に震えが走った。嘆きの精の予兆がじわじわと現実になりつつある。

「ジヴ。その掻き傷は」

「何」

突然の問いに、俺は反射的にザザを見た。

「頬におかしな跡が浮き出ています。まるで、とがった爪先で掻いたような」

その言葉に、俺は呻きを必死で噛み殺した。

あの夢の中で、女の爪が俺の頬を掻いた。そして、その跡が現実についている。

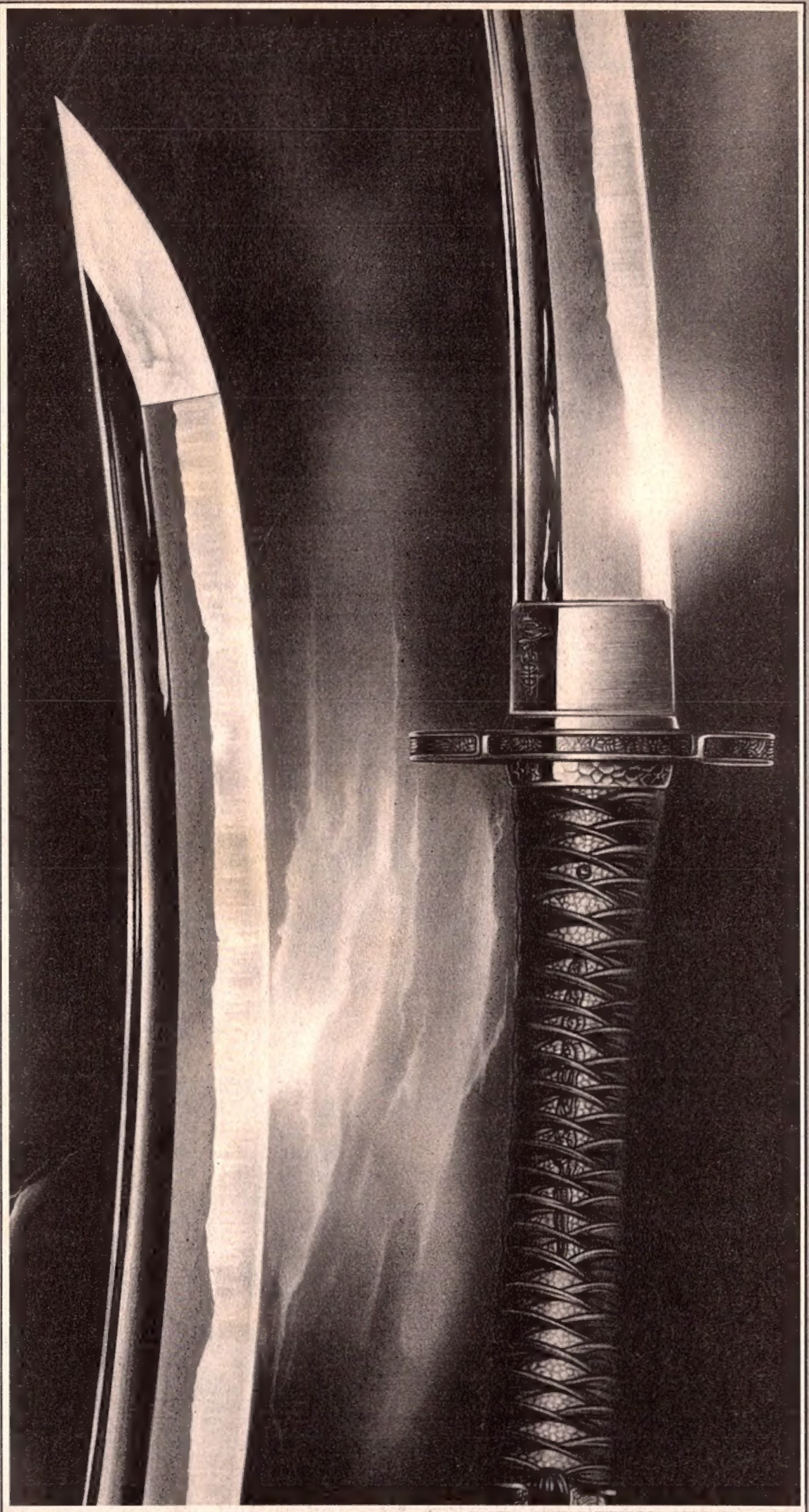
やはりただの夢ではなかった。

あの女は夢魔――夢の中で人を快楽の虜にし、墜落させる魔物だ。

続けざまの怪異と、夢魔。何かが起こりつつあると、俺は自覚した。

だが、それがはっきりと輪郭を帯びてくるのは、この日の夜明け以降のことだった。

（次号につづく）



●コミック版
ウィザードリィ外伝
――ギルの迷宮
作　石垣環

●小説ウィザードリィII
風よ。龍に届いているか
作　ベニー松山
イラスト　高橋政輝

▶コミック版ウィザードリィ外伝・ギルの迷宮は反対ページ(P108)からお読み下さい。